

## 日本人のマスク着用率と個人主義・集団主義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古家, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1710">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1710</a>

[研究論文]

# 日本人のマスク着用率と個人主義・集団主義

## Japanese People's Wearing Face Masks and Its Relationships with Individualism and Collectivism

古家 聡

キーワード：コロナ禍、マスク着用率、個人主義、集団主義、日本人大学生

### 1. はじめに

2021年5月25日の『朝日新聞』夕刊に「集団主義的傾向高いとマスク着用率 日本は・・・」と題する記事が掲載された。その全文は、以下の通りである。

個人より集団の利益を重んじる傾向がある社会ほど、コロナ禍でのマスク着用率が高い――。そんな傾向が確かにあるらしいことを米マサチューセッツ工科大などのチームが確かめ、論文を米科学アカデミー紀要に発表した。日本は、集団主義的な傾向はそれほど高くないが、マスク着用率は高いという結果だった。

ウイルスの感染拡大を防ぐマスクの着用率には国や地域でばらつきがある。その理由を説明するため、チームは各地の一般的な集団主義的傾向を見る指標に着目。フェイスブックや調査会社が集めた米国内外の90万人超のデータから着用率との関係を調べた。

その結果、米国では集団主義的な傾向が強いとされるハワイなどで着用率が高く、個人主義的な傾向が強いとされるノースダコタ州やモンタナ州で低かった。国別でも、米国や英国など個人主義的な傾向が強いとされる国で着用率が低く、韓国やタイ、アラブ首長国連邦など集団主義的な傾向が強いとされた国で着用率が高かった。

一方、日本は、集団主義的な傾向は、他のアジアの国や中南米などに比べると低かったが、調査によってはマスク着用率が95%を超えるほど高かった。チームは「文化的な違いを理解することは、将来の危機に対しても役立つだろう」と提言している。

(小坪遊)

これは小坪遊という記者の署名入り記事であるが、筆者は、この記事を読んで、いくつかの疑問を持った。まず、「日本は、集団主義的な傾向はそれほど高くない」のに、「マスク着用率は高い」のだとすれば、結局のところ、このアメリカの論文の趣旨である「集団主義的傾向が高いとマスク着用率も高い」という結果とは相反することになるのではないかということである。それとも、日本だけが例外的に「集団主義的な傾向は高くないけれども、マスク着用率が高い」ということなのであろうか。さらに、個人主義的傾向と集団主義的傾向というのは、何

を根拠にしているのであろうか。特に、国や地域を1つの文化集団として考えた場合に、個人主義的傾向と集団主義的傾向を示す指標とは何のことなのか、その点をはっきりさせたいと考えた。そこで、それらの疑問点を解決するために、実際のアメリカの論文を入手し、検討してみたところ、筆者にとっては驚くべきことがいくつか判明したので、それをもとに本研究のリサーチ・クエスチョンを以下のように設定して分析を行う。

リサーチ・クエスチョン：日本人のマスク着用率と集団主義は関係があるのか。

## 2. Lu, Jin & English (2021)

このアメリカの論文というのは、Jackson G. Lu、Peter Jin、そして Alexander S. English の3人の共著論文 *Collectivism Predicts Mask Use during COVID-19* で、PNAS (*Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*=米国科学アカデミー紀要)に掲載されたものである。本研究では、以下、この論文を Lu, Jin & English (2021) と表記する。

この論文は、次のように大きく分けて4つの調査を行っている。

Study 1a: Collectivism Predicts Mask Usage within the United States

Study 1b: Collectivism Predicts Mask Usage within the United States

Study 2: Collectivism Predicts Mask Usage in 29 Countries and Territories

Study 3: Collectivism Predicts Mask Usage in 67 Countries and Territories

最初の Study 1a は、アメリカの3,141の county (郡)に住む248,941人に対するアンケートのデータ分析で、Study 1b は、Study 1a とは別のアメリカ人16,737人を対象にしたアンケートのデータ分析であり、両方とも、アメリカの州ごとに Vandello & Cohen (1999) で示された集団主義のスコアとそれぞれの州のマスク着用率の平均値を一覧にしている。つまり、この2つの分析は、個人主義的傾向が強いとされるアメリカの国内でも、州ごとに検討してみると、集団主義的傾向に差があるという前提に立っている。しかしながら、論文に付録として掲載されている結果一覧を見てみると、集団主義的傾向の高いとされる州は、そのスコアが70を超えるものは、ハワイ州(91)、ルイジアナ州(72)、サウスカロライナ州(70)の3州のみである。60を超えるものを含めても、カリフォルニア州(60)を含めて6州が加わるに過ぎない。つまり、アメリカの州ごとの個人主義と集団主義のスコアを比較したと主張したとしても、個人主義的傾向が強い州のほうが圧倒的に多いなかでの比較なのである。そもそも、こうした州ごとの比較は、例えて言うならば、日本の都道府県ごとに、集団主義的傾向を数値化しているようなものである。それを信頼性と妥当性のあるものとして捉えることができるのかという疑問が生じるかもしれない。本研究では、紙幅の関係で、この2つの分析については、特にふれない。むしろ、問題は国際比較をしている Study 2 と Study 3 である。

Study 2 は、Study 1b でも使用した29か国の人々に対するアンケート調査をもとにしている (Study 1b では、29か国のうち、アメリカの分だけを使用している)。質問は、“How often have you worn a face mask outside your home (e.g., when on public transport, going to a supermarket, going to a main road) ?” 「外出の際 (公共交通機関に乗るとき、スーパーに行くとき、大通りに出るときなど)、どのくらいの頻度でマスクをかけますか」(筆者訳、以下同) で、0 = not at all, 1 =

rarely, 2 = sometimes, 3 = frequently, and 4 = always 「0=まったくかけない、1=めったにかけない、2=ときどきかける、3=しばしばかける、4=いつもかける」というスケールを与えている。結果として、29か国の367,109人から回答を得られたとしている。Study 3では、a question about whether they wore a face mask or covering to prevent COVID-19 infection in the past week (1 = yes, and 0 = no) 「コロナ感染を防ぐために前の週にマスクをかけたか何かで覆ったかかどうか」(1 = はい、0 = いいえ)を問い、さらに、“Out of 100 people in your community, how many do you think wear a face mask or covering when they go out in public?” 「あなたの共同体で100人のうち何人くらいが、外出の際にマスクをしたり、何かで覆っていると思いますか」と問うている。結果として、277,219人から回答を得たとしている。そして、Study 2とStudy 3の両方で、国ごとの集団主義の指標として、ホフステードの指標とGLOBEと呼ばれる指標を使っている。ホフステードの指標というのは、Hofstede (1991)などで示された個人主義スコアを100から引いた集団主義のスコアのことであるが、筆者にとっての驚きの1つが、このホフステードの指標を無批判で使っていたことなので、次項でホフステードの指標を国際比較に用いることの問題点を指摘する。GLOBEと呼ばれる集団主義の指標はHouse et.al. (2004)で示された数値のことである。GLOBEの指標については、紙幅の関係で、①62の国と地域を文化的社会集団として、17,000人の管理職を対象に調査した結果である ②集団主義を個人主義の対置概念として設定し、「社会的組織集団主義」と「社会的内集団集団主義」に分けてスコアを掲載しているが、Lu, Jin & English (2021)では、後者のスコアのみを使用しているということだけを記しておく。

### 3. ホフステードの国別文化比較の問題点

ホフステードの個人主義スコアとして公開されているインターネット (<https://www.hofstede-insights.com/country-comparison/>)に掲載されている国別の個人主義指標は、Hofstede (1991)がもとになっている。ホフステードがIBM社で働く世界50か国と3つの地域(アラブ諸国、東アフリカ諸国、西アフリカ諸国)出身のおよそ12万人に及ぶ従業員に対するアンケート調査を行い、「権力格差 (power distance)」「個人主義/集団主義 (individualism/collectivism)」「女性的価値/男性的価値 (femininity/masculinity)」「不確実性回避 (uncertainty avoidance)」という4つの因子を抽出し、それぞれを文化的次元としたのは、Hofstede (1980)においてである。Hofstede (1980)では、中国が対象になっていなかったが、その後のHofstede (1991, 2010)では、中国を含めてその対象を76の国と地域に広げて国際比較の一覧として掲載している。例えば、Hofstede (1980)では、日本は「個人主義指標」が46で50か国と3つの地域のなかでは第22位であったが、対象として13の国と地域が加えられたHofstede (1991, 2010)では、日本の「個人主義指標」は46で変わっていないが、順位は第35位となっている。

こうしたホフステードの研究は、多くの文化比較研究に強い影響を与え、その引用も極めて高いものとなっているが、ホフステードの研究を痛烈に批判する論文や主張も数多く存在していることを理解しておくこともまた必要であると考え。特に、国民文化という非常に大きなくくりで包括的にその文化的特徴を研究する場合には、ホフステードの研究に依拠することは慎重にならざるを得ない。以下に批判論文のいくつかを紹介する。

まず、ホフステードの因子分析に疑問を呈しているのが高野・纒坂（1997）である。やや長いが具体的で重要な指摘なのでそのまま引用する。

Hofstede（1980）が“個人主義因子”と名づけた因子が実際に個人主義の概念に対応しているのかどうかは、質問項目を詳細に検討してみると、はなはだ疑問に思われてくる。この因子における負荷量が最も大きい質問項目は次のとおりである。（質問はすべて“貴方にとってどれだけ重要ですか”という形式のものである。また、括弧内の数値は因子負荷量を表す。）正の負荷量が大きい項目は、“貴方の個人的な、あるいは家族の生活に十分な時間を残してくれるような仕事をもつこと”（.86）、“仕事において自分自身のやり方を選ぶかなりの自由があること”（.49）、“挑戦的な仕事、すなわち、個人的な達成感が得られるような仕事をもつこと”（.46）となっている。一方、負の負荷量が大きい項目は、“技能を向上させたり、新しい技能を修得するための訓練の機会があること”（-.82）、“良い物理的な労働条件（良い換気、照明、適切な作業空間など）が備わっていること”（-.69）、“仕事で自分の技能や能力を十分に活用すること”（-.63）となっている。

負の負荷量が大きい質問項目を一瞥すると、先に挙げた一般的な意味での集団主義・個人主義とはほとんど関連をもっていないことがわかる。むしろ、自分の能力を十分に発揮できるような労働条件との関連が深いように見受けられる。前記の項目以外に、“互いにうまく協力し合う人々と一緒に働くこと”（-.37）という項目も負に負荷しているが、負荷量の絶対値は小さいく、この因子を性格づける項目であるとは言いがたい上に、この項目にもいま挙げた労働条件との関連を認めることができる。一方、正の負荷量が大きい質問項目は、いずれも仕事に関係した個人的な満足感を表しており、やはり、一般的な意味での集団主義・個人主義とは関連が薄い。

（高野・纒坂, 1997: 315）

そして、「Hofstede（1980）の“個人主義指標”は、一般に理解されている個人主義には対応しておらず、信頼性も疑わしいものであり、これに基づく国の序列は、各国民の個人主義の程度を正確に表しているとはみなしがたい、と結論せざるを得ない」（高野・纒坂, 1997: 316）としている。

こうした因子分析の問題点を指摘する論文は、他にもある。例えば、高橋（2016）では、ホフステードの因子分析を詳細に批判したあとで、以下のように述べている。

このように国際比較は正直に言って難しい。出てきた統計数値が一体何を意味しているのか、その数字だけを見てはよくわからないのである。そのことは別に国際比較調査に限ったことではないのだが、しかし国際比較調査では、どうしても統計数字を拠り所として、その差異をことさら強調することで、国、文化を特徴付けるアプローチにはまってしまう。そのため、なおのこと怪しい。意地悪な見方をすれば、ホフステードの研究も、計量的な分析を覆っているのは、ローマ帝国まで登場するような延々とした「こじづけ」話にすぎない。多分、データに合わせて、どんな話でもしてくれるのだろうと思えてしま

う。それに学問的価値がないとまでは思わないが、しかし、そんなものが科学の名に値するものだとも思えない。「国際比較」データの幻想に酔っているだけのように見える。

（高橋, 2016: 200）

かなり手厳しい調子で批判しているが、以下のように、ホフステードの研究は国民文化というよりは、IBM という企業における文化的差異として捉えるべきではないかとも述べる。

以上のようなことを踏まえると、結果を解釈する際に決定的に重要になるのは、むしろ国による差異をことさら強調することではなく、IBMに限らず、企業には文化があるという事実発見ではないだろうか。特にIBMが会社としての独自のアイデンティティ (corporate identity)、すなわち会社の下位文化 (company subculture) をもっていて、それがうまく従業員に誇りの気持ちを増進させているということはホフステッド自身も認めている (Hofstede, 1984, p. 40, 邦訳 p. 40)。であるとするならば、いまや論理的にも国民性の下位文化として企業文化があるのではなく、IBMのような多国籍企業では、逆に企業文化の方に主導権があり、国民性は企業文化に差異をもたらすものなのではないだろうか。

（高橋, 2016: 203）

さらに、ホフステッド批判を展開している佐藤（2008）でも、Hofstede の文化観は多くの組織文化論の主張とは異なるとした上で、「データそのものの値も疑わしいが、データの解釈についても懐疑的にならざるをえない」（佐藤, 2008: 830）とし、以下のように論じる。

まず、Hofstede の分析結果を見ると、IBM の従業員が一国の国民文化を代表できていないことがわかる。たとえば、日本は男らしさの次元において 53 位中 1 位と、最も男性らしい国民文化をもつとされている。これは、日本が収入や昇進を重視し、上司との関係や協働をあまり重視しないという傾向の強さを示している。しかし、世間一般の常識として、果たしてこの結果に同意できるだろうか。日本 IBM の従業員が男性らしい価値観を持っていたとしても、それが一般的な日本人を代表しているとは言いがたい。

また、藤田（1999）によると、Hofstede が米国 IBM における不確実性の回避 (UAI) スコアを計算ミスしており、Hofstede の記載では 46 であるが、実際には 61 であることが分かった。Hofstede は、米国を不確実性の回避が弱い国として解釈を加えているが、もし、米国 IBM が米国の国民文化を代表しているとすれば、Hofstede は事実誤認をしていることになる。Hofstede が計算ミスに気がつかなかったのは、間違った米国 IBM のスコアが自身の解釈に近く、都合の良いものだったからであると想像できる。そうすると、米国 IBM は米国の国民文化を代表しているとは言いがたい。

（佐藤, 2008: 827）

ホフステードの研究は、国民文化を序列化しているが、これはあくまで IBM という多国籍企業における企業文化、つまり、組織文化についての分析とするべきではないかということを生

張しているわけである。そして、国民文化を測定することは極めて難しいということを、佐藤(2008)では以下のように述べている。

以上、Hofstedeの研究を文化という概念の捉え方、方法論の両方にわたり検討してきた。その結果言えるのは、Hofstedeは国民文化と組織文化の線引きにこだわり、その議論を厳密にしようとしたため、かえってフレームワークを複雑化させてしまい、結局何を測定したかったのかが曖昧になってしまったということである。そもそも、文化という概念そのものが目に見えるわけではなく、形成されるプロセスも客観的に明らかにしづらい性質であるため、それをさらに国民文化、職業文化、組織文化と分けること自体に限界があると言えるだろう。なぜなら、もし国民文化と組織文化を厳密に線引きして議論をしようとするのであれば、測定された文化が本当にその国家、あるいはその組織固有の特徴によりもたらされたものであることを証明しなければならないからである。価値観のレベルでの文化は、本人にとっても無意識のうちに形成される傾向にあるため、より調査が難しくなる。(佐藤, 2008: 830)

ここまで、ホフステードの研究は、あくまでIBMという企業、組織における従業員に対するアンケート調査の結果であり、それを国民性や国民文化の特徴とすることの問題点を指摘してきたが、古家(2008)では、調査対象者の属性の問題について、次のように述べている。

文化的価値観というからには、同一の文化内ではほとんどの人に共有されるものでなければならない。しかし、Hofstede(1980,1991)のように国を序列化し、国を1つの文化的単位として考えた場合、その構成要員は多層化しているのであり、社会人、主婦、大学生などが同じ価値判断を共有しているとは限らない。したがって、Hofstede(1980,1991)は文化的価値観というよりは、IBMの従業員という社会を構成する1つの層の人々に適用して比較したのであり、その結果をもって国の文化差とするのは無理があるのではないだろうか。実際に、Matsumoto(2002)では、平均年齢39歳の日本人では68%が集団主義的な価値観をもっているが、大学生の場合には71%が個人主義的な価値観をもっているという逆転現象の結果を報告しているように、個人主義と集団主義に関しては、被検者の属性によって違う結果が出てくることもあり、同一文化内で違う結果が出るのであれば、それは文化的価値観とはいえないはずである。

(古家, 2008: 140)

以上のように、ホフステードの研究は、質問内容の問題点、因子分析の問題点、そして、国民文化についての属性の点でも、非常に問題のあることを指摘してきたが、そのホフステードの指標を無批判に使っているのが、Lu, Jin & English(2021)なのである。しかも、この論文における集団主義というのは、ホフステードの個人主義スコアを100から引いた数値である。つまり、あくまで個人主義と集団主義は1つのスペクトラムの両極に位置しているように考え、この2つの概念を2項対立的に捉えているのである。だから、『朝日新聞』の記事で「日本は、

集団主義的な傾向はそれほど高くない」と記述せざるを得なかったのは、インターネットに出ているホフステードの「個人主義スコア」は46であり、その国ごとの individualism の説明において「日本は集団主義的特徴をもつ社会であるが、中国や韓国など他のアジアの国々に比べればそれほど集団主義的ではない」（筆者による要約と日本語訳）とあり、「西洋の基準からすれば集団主義的で、東洋の基準からすれば個人主義的と感じられる」（同上）としているからであろう。つまり、日本を集団主義とも断定できず、Lu, Jin & English (2021) では、日本のことには一切ふれていないにも関わらず、日本人読者を想定した『朝日新聞』の記事では、日本のことにも焦点をあてたために「日本は、集団主義的な傾向はそれほど高くないが、マスク着用率は高いという結果だった」と記述せざるを得なかったのであろう。

#### 4. Lu, Jin & English (2021) における「集団主義」と「国別マスク着用率」

さて、Lu, Jin & English (2021) では、集団主義という場合の指標は、前述したホフステードの指標（100 から個人主義スコアを引いた数値）と GLOBE と呼ばれる集団主義の指標の両方を記載しているため、非常にわかりづらいものになっている。例えば、日本はホフステードでは54（個人主義スコアを100から引いた数値）で、GLOBE では4.63となっているが、イタリアはホフステードでは24で、GLOBE では4.94となっている。つまり、ホフステードでは日本はイタリアと比べると集団主義的傾向が高いが、GLOBE では日本はイタリアよりも集団主義的傾向が低いということになる。このように2つの指標を並べることにより、いったいどちらの指標で判断すべきなのか混乱が生じる可能性がある。

次に、国別のマスク着用率のスコアを見てみると、Study 2 では、5段階評価で、日本は3.48で、イタリアは3.70なので、イタリアのほうがマスク着用率は高いという結果になっている。Study 3 では、回答者のうちどのくらいの割合の人がマスクを着用したかを数値化しているが、日本は95.2%で、イタリアは94.5%であり、両方も全体のなかではかなり高い数値であるが、日本のほうがマスク着用率は高いのである。日本とイタリアという2国だけを比較しても、Study 2 と Study 3 で違う結果を示している。そうすると、Lu, Jin & English (2021) では、統計処理によって、集団主義とマスク着用率は関係があり、全体として集団主義的傾向の強い国はマスク着用率が高いとしているが、日本とイタリアの比較のように、具体的に国別に見た場合に、集団主義とマスク着用率の関係性があるのかわからないのである。

また、Lu, Jin & English (2021) では、前述した質問項目により、マスク着用率と集団主義に相関関係を見出したと主張しているが、集団主義だからマスクを着用するのか、マスク着用率が高い国々が「結果として」集団主義の国であったのか、はっきりしない。おそらく「集団主義の国々ではマスク着用率が高いのではないか」という前提のもとに調査を進めた結果、それがデータとして示されたということではないかと推測される。しかしながら、では、私たちはなぜマスクを着用するのかという基本的な行動原理についてはいっさい示されていない。ある現象がその社会の特徴を示すものであっても、なぜそうした現象が起こるのか、つまり、行動原理を分析しなければ、本当の意味での社会的現象の分析にはならないはずである。マスク着用を文化的価値観としての個人主義と集団主義に関連付けて研究するのであれば、個人主義的

傾向の強い国であれ、集団主義的傾向の強い国であれ、それぞれの文化において、その行動原理を考へてみるこゝが解釈主義的アプローチでは肝要である。マスク着用という社会的現象の正しい解釈をするには、個人主義と集団主義を自明の価値観として指定するよりは、その前に、現実の生活におけるマスク着用の理由を問うこゝが重要なのであり、そうした行動原理の分析により初めて集団主義とマスク着用率が関係しているのかどうか分かるのではないかと考へる。

## 5. 大学生のマスク着用の行動原理

### 5.1 アンケート調査

そこで、筆者は、筆者の所属する都内私立大学の学生に協力をしてもらい、大学生のマスク着用の行動原理を調べるために、以下のようなミニ・リサーチを行った（アンケート用紙は付録を参照）。

調査協力者は、筆者が担当する3つの授業（1年生クラス、2年生クラス、3・4年生クラス）を履修している1年生21名、2年生16名、3年生8名、4年生3名、合計48名（男性16名、女性32名）である。

アンケートの質問項目1は、「なぜマスクをするのか」という行動原理を問うもので、それに対する回答として、集団主義に相当すると考へられる「a. 他人にコロナをうつしたくないから」と個人主義に相当すると考へられる「b. 他人からコロナをうつされたくないから」とした選択肢を2択に限り、どちらかを選ぶものと、さらにこうした2項対立的に捉えるだけではなく、マスク着用に関しては、その両方もあり得ると考へ、3択目として「c. その両方」を設定してみた。さらに「それ以外の理由があれば、書いてください」として自由記述欄を設けた。なぜ、3択も設定したのかについては、古家（2011）で「日本的コミュニケーション・スタイル」とは「A or B という二者択一ではなく、できれば A and B という両者並列を望んだり、あるいは白か黒かではなく、その中間の灰色を選んだりする。これは『両義性』や『両立性』を重視したコミュニケーション・スタイルである」（古家, 201: 1144）と述べたことに基づいている。

次に、質問項目2として「あなたは、外出時にマスクをすることをどう思っていますか」と尋ねてみた。選択肢は「a. できれば外したい」、「b. そんなに抵抗はない」「c. 当然だと思っている」の3つである。実は、この質問は、Lu, Jin & English（2021）で「個人主義的文化では多くの人々がマスクというのは個人の選択や自由を侵害している象徴とみなしている」（筆者訳）という記述があったので、それに関連するものである。日本人大学生の場合、もし、個人主義的傾向が強いのであれば、「a. できれば外したい」が多いはずである。

さらに、質問項目3として「あなたは、コロナ禍以前に風邪を引いたときにマスクをすることはどの程度ありましたか」を設定した。これは、コロナ禍以前から、日本人の場合には、多くの人たちがマスク着用を選択していたのかを知るために質問である。選択肢は「5=常にしていた」「4=だいたいしていた」「3=わからない」「2=あまりしていなかった」「1=ほとんどしなかった」の5つを用意した。

## 5.2 結果と考察

まず、質問項目 1 のうち選択肢を 2 択にした場合の結果は、「a. 他人にコロナをうつしたくないから」が 1 年生から 4 年生までの合計が 9 名（19%）、「b. 他人からコロナをうつされたくないから」が合計 39 名（81%）であった（図 1）。つまり、全体の 80%を超える学生が「個人主義的」な行動原理と言える「他人からコロナをうつされたくないから」を選んでいたのである。この結果からは、少なくとも大学生のマスク着用が集団主義と関連があると断定はできないし、むしろ、個人主義的な行動としてみなされることがわかる。

次に、質問項目 1 のうち選択肢を 3 択にした場合の結果は、「a. 他人にコロナをうつしたくないから」は 0 名で、「b. 他人からコロナをうつされたくないから」が合計 7 名（15%）で、「c. その両方」が合計 39 名（81%）、そして、無記入（どれも選ばなかった）が 2 名（4%）であった（図 2）。このことは、2 択の場合には、「a. 他人にコロナをうつしたくないから」を選んでいた学生も、3 択になって「c. その両方」を選ぶことが可能である場合には、「他人にうつしたくない」だけではなく、「他人からうつされたくない」とも思っているということを表している。

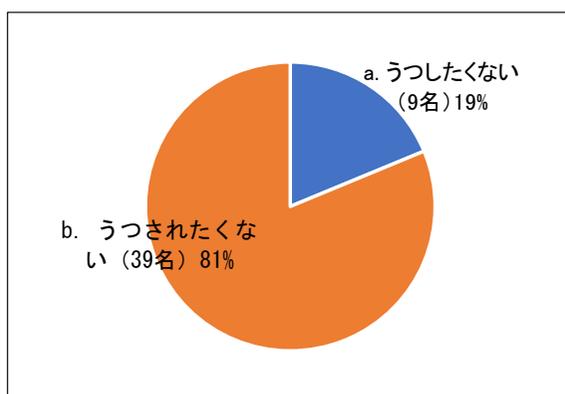


図 1 なぜマスクをするのか（2 択の場合）

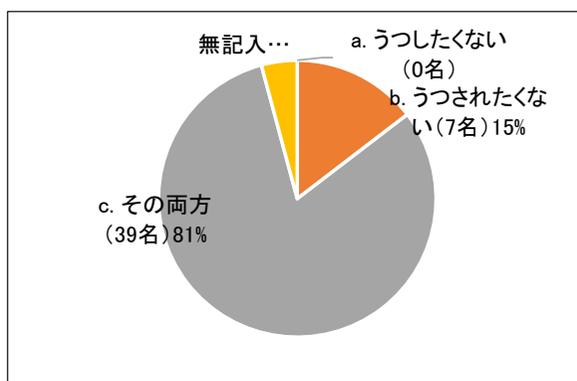


図 2 なぜマスクをするのか（3 択の場合）

そして、全体の 80%強の学生がマスク着用とは、「他人からうつされたくない」からだけでなく、「他人にうつしたくない」ということも想定していることがわかる。つまり、マスク着用は、個人主義的な「他人からうつされたくない」だけではなく、「他人にもうつしたくない」という集団主義的な理由をも選好しているのであり、マスク着用が個人主義的な行動か集団主義的な行動かという2項対立的に単純に捉えるよりは、「他人からうつされたくない」と同時に「他人にもうつしたくない」という両義性や両立性を持ち合わせているということの証左となっていると言えるのではないだろうか。

質問項目2の「あなたは、外出時にマスクをすることをどう思っていますか」は、Lu, Jin & English (2021) で、個人主義の場合、多くの人々がマスク着用を自由の侵害だとみなしているとの記述があったので、この質問を設定し、日本人大学生に聞いてみたが、結果は、「a. できれば外したい」が合計15名(31%)、「b. そんなに抵抗はない」が合計22名(46%)、「c. 当然だと思っている」が合計11名(23%)であった(図3)。「a. できれば外したい」というのは、Lu, Jin & English (2021) との関連では、どちらかと言えば個人主義的な思いである。この「a. できれば外したい」が全体の3分の1弱いることをどう捉えるべきであろうか。また、「b. そんなに抵抗はない」が一番多く46%であったことや、「c. 当然だと思っている」が23%であることは、どのような意味を持つのであろうか。個人主義的な思いと集団主義的な思いの両方が混在しているとは言えるが、少なくとも Lu, Jin & English (2021) で主張しているような「集団のために自己犠牲になる」というような集団主義ではないことがわかる。また、「そんなに抵抗はない」とか「当然だと思っている」としても、それは、集団の利益のためというよりは、あくまで個人としての思いであり、それは古家(2010)や古家(2018)で述べている「利己的協調主義」の発露と考えられる。つまり、マスクを着用することが、結果的に自己の利益になる(この場合には、マスク着用によって、自分もコロナにうつされたくないし、他者にもうつしたくないので、マスク着用で抵抗がないし、当然だ)という思いであると解釈できるのではないだろうか。

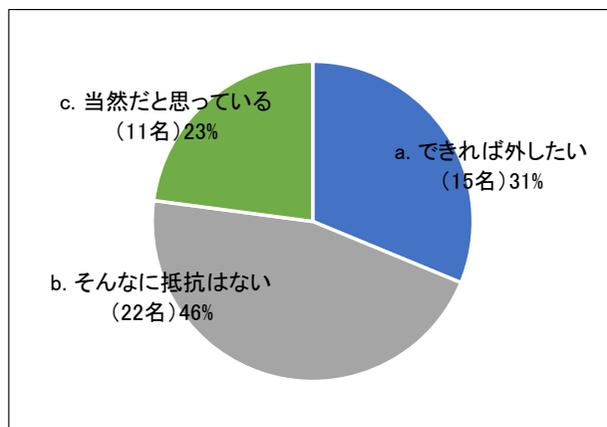


図3 外出時のマスク

そもそも、日本人のマスク着用は、コロナ禍以前から割とよく見る行為ではないかと考え、質問項目3を設定してみた。「あなたは、コロナ禍以前に風邪を引いたときにマスクをすることはどの程度ありましたか」という質問に対して、「5＝常にしていた」が10名（21%）、「4＝だいたいしていた」が20名（42%）、「3＝わからない」が2名（4%）、「2＝あまりしていなかった」が9名（19%）、「1＝ほとんどしなかった」が7名（15%）という回答結果であった（図4）。「常にしていた」と「だいたいしていた」を合わせると63%になるが、筆者としては、80%を超えるのではないかと想定していたので、「あまりしていなかった」と「ほとんどしなかった」を合わせると34%になることを考えると、必ずしも、今回の調査協力者については、コロナ禍以前からマスク着用が習慣化していたわけではないようである。男性と女性でもほとんど差がなかったため、特に性別に関係している要因でもなかった。

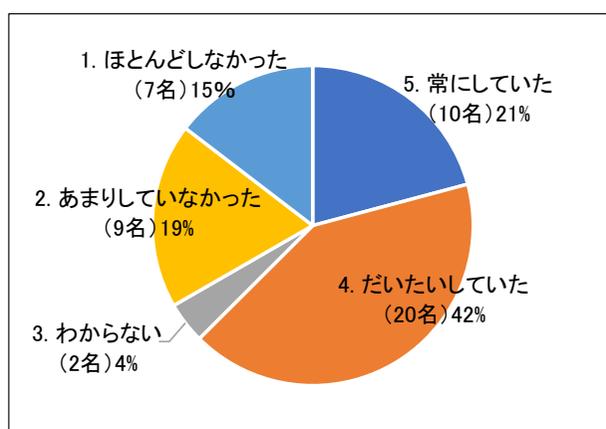


図4 コロナ禍以前のマスク着用

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、『朝日新聞』の記事の根拠となっていた Lu, Jin & English (2021) が無批判にホフステードの個人主義スコアとして公開されているインターネットの数値を使用して集団主義的な傾向の強い国々を決めているため、ホフステードの個人主義スコアを国民文化の特徴として用いることの問題点を数々の批判論文を紹介して、具体的に指摘した。また、Lu, Jin & English (2021) では、マスク着用率と集団主義的傾向を統計処理によって、集団主義とマスク着用率には関係があり、全体として集団主義的傾向の強い国はマスク着用率が高いとしているが、個別の国同士を比較した場合、そこに矛盾が生じている例があることも、具体的に、日本とイタリアをあげて紹介した。

本研究のリサーチ・クエスチョンである「日本人のマスク着用率と集団主義は関係があるのか」については、大学生の行動原理をアンケート調査した結果、マスク着用率を単純に個人主義的行動原理からなのか、集団主義的行動原理からなのかという2項対立的に考えた場合には、集団主義的な行動原理にもとづいてマスクを着用しているわけではなく、どちらかと言えば、

個人主義的な行動原理によるものと考えられることが判明した。このことは、Lu, Jin & English (2021) において集団主義を「自分の集団の利益のために自分の利益を犠牲にする」と定義づけていることに即して言えば、日本人大学生の場合には、決して自己犠牲の価値観でマスクを着用しているわけではないことが示された。しかも、選択肢を広げて3択で考えた場合には、個人主義的行動原理と集団主義的行動原理の両方を前提としていることもわかった。つまり、マスク着用は個人主義的な行為であると同時に集団主義的な行為でもあるという極めて両義性の高い行動であると解釈すべきなのである。さらに、マスク着用は、できれば外したいと考えている個人主義的な思いを持つ日本人大学生の割合が約30%である一方で、集団の利益のためというよりは、個人の意思によって抵抗がない、あるいは当然だと思って着用している割合は約70%であったことから、日本人大学生のマスク着用は、Lu, Jin & English (2021) で述べているような集団のために自己犠牲にしているという集団主義の特徴としての行為では決していないことがわかった。

今後の課題としては、今回の調査対象が48名と少ないということ、また、大学生という属性ですべての日本人の傾向や行動を推定することはできないこと、などが考えられる。本研究は、あくまで日本人のマスク着用率の高さに関する分析のイントロダクションである。ミニ・リサーチをしたことにより、日本人大学生のマスク着用の行動原理がある程度理解できたのではないかと考える。また、マスク着用に対して抵抗があるかないかは、顔の表情を読み取る際に、視線を目元に合わせるのか、口元に合わせるのかという違いについて個人差と同時に文化差が関係しているかもしれない。例えば、サングラスで目元を覆われると不安を感じるのに対し、マスクなどで口元を覆われると不安を感じるというような差異である。そうした要因も含めて、今後は、集団主義だからマスクを着用するというような単純な考え方ではなく、行動原理に即したより精緻な分析が求められる。そのためにも、個人主義と集団主義の概念を正確に把握し、日本人のマスク着用率の高さに対する文化的解釈を提示することが、将来の危機に対しても意義がある研究になると考えている。

\*本稿は、「異文化コミュニケーション学会 (SIETAR JAPAN) 第36回年次大会 (オンライン)」における筆者の口頭発表「マスク着用率と集団主義の関係性に関する一考察」をもとに、大幅に加筆し新たに執筆したものである。

#### 参考文献

- 『朝日新聞』2021年5月25日夕刊
- 佐藤悠一 (2008) 「国民文化と組織文化：Hofstedeは何を測定したのか？—経営学輪講 Hofstede (1991)」  
『赤門マネジメント・レビュー』7, 821-832.
- 高野陽太郎・櫻坂英子 (1997) 「“日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義”—通説の再検討」『心理学研究』68, 312-327.
- 高橋伸夫 (2016) 『経営の再生 (第4版)』有斐閣
- 藤田英樹 (1999) 「国民文化の比較の可能性」高橋伸夫編著『生存と多様性：エコロジカル・アプローチ』  
(第10章) 白桃書房

- 古家聡（2008）「個人主義と集団主義に関する批判的考察—ナショナリズムと文化本質主義の関連から」『インターカルチュラル』6, 131-143.
- 古家聡（2010）「日本のコミュニケーション・スタイルのマクロ的再解釈—日本人集団主義説をもとに」『ヒューマン・コミュニケーション研究』38, 173-192.
- 古家聡（2011）「日本のコミュニケーション・スタイルに関する一考察」『The Basis』1, 135-148.
- 古家聡（2018）「日本人集団主義説の再解釈—『利己的協調主義』をもとに」『Global Studies』2, 27-36.
- House, R. J., Hanges, P. J., Javidan, M., Dorfman, P. W., & Gupta, V. (2004) *Culture, Leadership, and Organizations: The Globe Study of 62 Societies*. Sage Publications.
- Hofstede, G. (1980) *Culture's Consequences: International Differences in Work-related Values*. Beverly Hills, CA: Sage.
- Hofstede, G. (1991) *Cultures and Organizations: Software of the Mind*. McGraw-Hill.
- Hofstede, G., Hofstede, G. J., & Minkov, M. (2010) *Cultures and Organizations: Software of the Mind, 3rd ed.* McGraw-Hill.
- Lu, J. G., Jin, P., & English, A. S. (2021) Collectivism Predicts Mask Use during COVID-19. In *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. Retrieved from <https://doi.org/10.1073/pnas.2021793118>
- Matsumoto, D. (2002) *The New Japan: Debunking Seven Cultural Stereotypes*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Vandello, J. A., & Cohen, D. (1999) Patterns of Individualism and Collectivism across the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77(2), 279-292.

## 付録 アンケート用紙

### アンケートへのご協力

以下は、古家の個人主義と集団主義に関する調査の1つとして行うもので、自由意思によって参加していただければと思います。参加されなくても、不利益を被ることはありません。なお、個人を特定するものではありませんが、調査のあとの研究分析が終わり次第、アンケート用紙は、調査者である古家が責任を持ってすべて破棄いたします。このアンケートにご協力いただいた場合には、本研究への協力者として参加することに同意されたとみなしますので、ご了承ください。私の連絡先は、satoru\_f@musashino-u.ac.jp です。

学年（ 1 2 3 4 ） 性別（男性 女性 その他）

国籍（ ） 主に育った場所・国（ ）

1. コロナ禍の状況にあつて、外出する際に、あなたは、なぜマスクをするのでしょうか？

2 択の場合（どちらかを選んでください）

- a. 他人にコロナをうつしたくないから。
- b. 他人からコロナをうつされたくないから。

3 択の場合（3つのうちから選んでください）

- a. 他人にコロナをうつしたくないから。
- b. 他人からコロナをうつされたくないから。
- c. その両方。

それ以外の理由があれば、書いてください。

（ ）

2. あなたは、外出時にマスクをすることをどう思っていますか。

- a. できれば外したい。
- b. そんなに抵抗はない。
- c. 当然だと思っている。

3. あなたは、コロナ禍以前に風邪を引いたときにマスクをすることはどの程度ありましたか。

5=常にしていた。

4=だいたいしていた。

3=わからない。

2=あまりしていなかった。

1=ほとんどしていなかった。